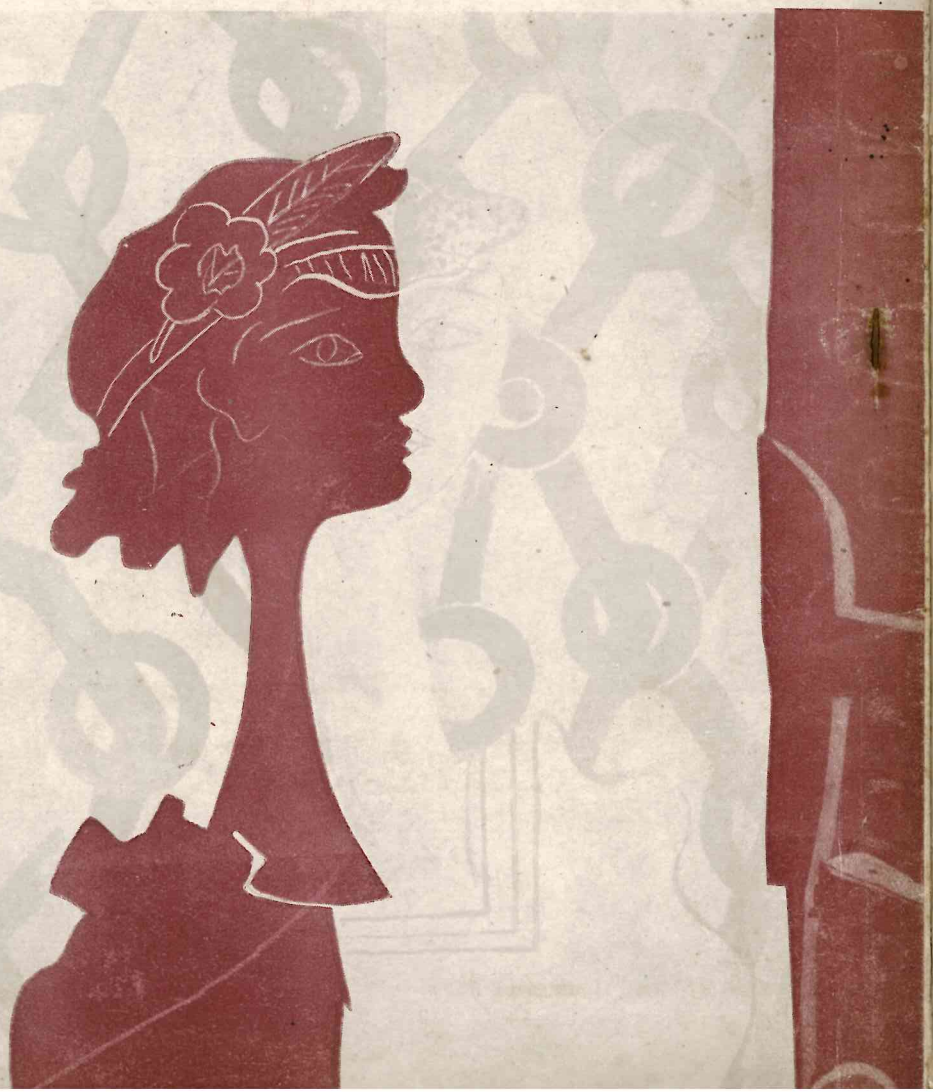
七曜

VOL. 3 NO. 2

昭和二十三年三月八日 第三種郵便物認可
昭和二十五年一月二十日印刷 第三卷 第二號
昭和二十五年二月一日發行



七曜俳句會

昭和二十三年三月八日 第三種郵便物認可
昭和二十五年一月二十日印刷 第三卷 第二號
昭和二十五年二月一日發行

募集

雜詠（七曜集）五句

橋本多佳子選

〆切……毎月末

用紙……ハガキ

（送先）奈良市油阪東町

七曜俳句會

一、質疑誌上解答

用紙……ハガキ

会員各位より難解句、疑問句、理解し難い評論等について質問を御送り下さい、誌上解答致します

編集部

天狼大阪句會

日時　毎月第一日曜午後一時より

場所　中村屋食堂　堂島中町（渡辺橋北半丁西側）

天狼京都句會

（七曜京都句会合併）

日時　毎月第三日曜午後一時より

場所　寺町四條下ル　大雲院内

（詳細は志賀紫泉、京都市中京区夷川通室町東入ルニ問合セラレタシ）

七曜大阪句會

日時　毎月第二日曜日午後一時より

場所　大阪上本町六丁目（近鉄本社前三和劇場西入ル一丁生玉神社燈籠南ヘ半丁）つるや旅館

七曜婦人句會

日時　二月二十日（月曜日）午後一時

場所　あやめ池　多佳子居

会費（半期　二百四十圓　一年　四百八十圓）

会費切れの節は一ケ月前に通知票を雜誌に入れて御報せして居ります

送り先　奈良市油阪東町四三九

七曜發行所

昭和二十三年三月八日第三種郵便物認可
昭和二十五年一月二十日印刷
昭和二十五年二月一日發行
〃七曜〃 第三卷 第二號
会費四十圓
奈良市油阪東町四三九
編集發行人　小山信一
奈良市西寺林町一四
印刷人　長澤恒二
奈良市西寺林町一四
印刷所　奈良共同印刷株式會社
奈良市油阪東町四三九
發行所　七曜發行所

七曜

通巻 26

目次

ボーイズ・ビー・アンビシヤス　山口誓子

（作品）風花　橋本多佳子
読み初め　山口波津女
舌紅き　小山都址
リユーマチ多し　堀内小花
静臥　橋本大三
神と妻　丘本風彦

若き俳人への手紙　田中克巳
合理主義俳句　堀内小花

作品室　同人
俳句恩（はい談リレー〔3〕）　山田炎子

七曜集（雑詠）　橋本多佳子選
嶮しからむに（選後評）　橋本多佳子

恍惚と不安と　藤井実雄

ボーイズ・ビー・アンビシアス

山口誓子

この言葉を始めて聞いたのは中学の三年のときだつた。

私は樺太の大泊中学の三回生であるが、第一回の卒業生を送る爲に辯論大会が催されたとき、私も壇上に立たされ、「悲觀について」といふ題で、たどたどしい話をした。私のあとに立つた二回生のS君は、話の途中で急に声を大きくして「ボーイズ・ビー・アンビシヤス」と叫んだ。それはクラークといふ先生の云はれた言葉であることを私は始めて知つた。その言葉は卒業してゆく先輩への餞として実にふさはしい、花束のやうな言葉であつた。いゝ言葉を知つてゐて、それを最も適切な場合に使用したものと、私はS君の話に感じ入つた。

それを餞として受けた卒業生達はそんなことはもうすつかり忘れてしまつたらう。たとへその言葉の如く、青年の野心を燃やしたとしても、その野心の多くは実現を見ずして終つたらう。

私はその言葉をいつまでも忘れずにゐた。そしてその言葉は、札幌農学校のクラーク先生が、学生達に向つて云はれた言葉だといふやうなこともわかつて來た。

若き俳人への手紙

田中克己

一

現代俳句について何か書けとのことですが、帰宅してからいろ〳〵考へて見た結論は、私には書く資格がない、といふことです。さして多くもない藏書ですが、ながめわたして見たら、俳句に関する書物は、日本古典全集の「蕪村」と岩波文庫の「花屋日記」――これが質作の由は小宮豊隆氏によつてはじめて知りました――もとより虚子句集も草田男ももつてゐません。現代俳句について語るなどもつての外でせう。そう〳〵そのうへもう一冊、このまへ著者から頂いた「現代日本文化の反省」があつて、その中の「第二藝術」「山口誓子氏に」「芭蕉について」は特に感嘆して拜見してゐるのです。これだけからでも私が現代俳句について語ることは、俳人たる大兄をお喜ばせすることになるまいと確信しないわけにはゆきません。

たゞし俳句の一般普及性から、私にも全然縁がないわけではありません。大学時代、某旧藩主の御曹子でO君という同級生がゐて、講義休みの時などの話に、彼が俳句を作るのを知り、僕も作るのだといつて見せた句が

秋立つや茄子すがれし畑の雲

昭王の園や牡丹に蟻のぼる

の二句、彼は一吟、へんな顔をしただけで、批評もしてくれませんでした。終戦ごろまで侍從をしてゐた筈の彼は、いま何をしてゐることでせう。彼の俳句についてはその後もとより何も聞きません。

次の作句の経験は、戰爭勃発の直後、スマトラの西海岸州に行つて、インダルンのセメント工場を見に参り、州のY長官に会ひました。この人は私の友人の兄で、虚子門下で俳句をたしなまれるといふのを知つてゐましたので、句を作つてさし上げる氣になり、一心になつて作つたのが

海青し印度洋とは申すめり

といふのでした。これに対する長官の返句は

書きつゞく南洋日記守宮(やもり)啼く

でしたか。

そんなわけで、これは桑原先生の本からの孫引きですが、「俳句のことは自身作句して見なければわからぬものである」と、秋櫻子先生から叱られないですむかもしれませんが、現代俳句への無智無関心はいつはるべくもありません。おことはりが大変おそくなりましたが、あしからずお許し下さい。

二

重ねての御命令と〝天狼〟三冊たしかに拜受いたしました。〝天狼〟といふのは大犬座のシリウスのことだつたのを、おかげで何年ぶりかで思ひ出しました。この星が輝いてゐる、またずつと下の方、海から二、三尺のところに中國人のいはゆる老人星、アルゴ座のカノープスがこれに劣らぬ光度で輝いてゐるのを見て、永い間の渇望をいやしたのは、これも南方へゆく途中、台湾の打狗(たかを)港外でのことでしたか。私は大体星のことが好きで、野尻抱影先生ゐまさゞりせば「世界文学に現はれた星」とでもいふ大論文を書いて見たく思つてゐるほどですので、大変うれしいことゝ思ひました。

閑話休題――お作が三冊のうち、たゞ二句しか出てゐないのはどういふわけですか。もし三ケ月にたつた二句で、おすませになれるやうな作句精神なら論外ですし、善悪に拘はらず二段組二句欄に常詰めといふ〝社則〟でもあるのでしたら、これは早々改めていたゞかねばなりませんね。二句の中、はじめの

雁の夜や切手の甘さ舌に残る

といふ句は、一應いたゞきます。たゞしこれが恋の句だといふことが、大兄の御説明がなければわからなかつたといふのは、私の鈍感からでせうか。切手にまたアラビヤ糊のつくやうになつたことは、戰後のうれしさの一つですが、その味ひは私はおぼえてゐません。「切手の甘さ」で恋情を表現なさる幽幻さには、おそれ入るよりほかありません。世は挙げて恋愛時代――けふの新聞にも厨川文夫教授が二十年の妻を棄てて、恋愛結婚をされたとの記事が出てゐます――それなのに、俳人の恋愛をうたふことの何ぞ少きや、といぶかるざるを得ないのは私一人ではないでせうね。「ひとはみな生涯に一度は詩人になる」といふのは、必ずや恋愛と詩との密接な関係から出たことばなのにちがひありませんが、俳句がもしも同じくリリシズムの藝術であるとしたら、これはどうしたことでせう。大兄の二句の載つてゐる同じ號の同じ欄から、私はこゝろみに拾つて見ました。

炎天を蹤き來し女愛し得ず
氷菓溶けゐたり愛すと言ひがたし
いなびかり女ちかづきゐるを知る
媾曳のやがて男が泳ぐなり
綠蔭に恍惚と処女膝くづす
くちづけや息白しとは思はざり
櫻貝少女の誰に頒つべき
若き夜を露に彷徨して帰る
踊場の寡婦に男の息かかる
螢よぶ妻に疑心の深まれり
うろこ雲二十歳の恋がよみがへる

もし大兄の句のやうに説明がつけば、「恋の句」とわかるものが、まだ沢山あるのかもしれませんが、ちよつと見ただけで恋の句らしいと思ふものを無理にひろひあげてこの十一句だけ見つかりました。みんなで三百首近く、二百人以上のひとの出詠で、この数しか見つからないといふのは、私にとつてはふしぎなことです。あるひは選者の誓子先生が恋の句はおきらひで、はねのけられたのかも知れませんが、やはりこれでは桑原先生のいはれるやうに、芭蕉ばかりではなく、現代俳句にも恋愛がないといつてよいといはざるを得ません。これは、私ども愚かにも西洋をモデルとし、西洋人を宗匠と仰ぐ詩人の輩とは全くジヤンルを異にした藝術だといはねばなりますまい。なんだか批評めいて來ましたが、私どものリリシズムとは、ちよつとちがつた世界に生きてゐるでのことが、「若き俳人」たる大兄には氣の毒なやうで、この筆をとりました。

二伸、尊敬する先輩萩原朔太郎先生の「郷愁の詩人與謝蕪村」は私の坐右の書でしたので、蕪村は古俳人のなかで一等なまめかしい詩人のやうに錯覚してゐましたが、いま蕪村句集をひもどいてみますと、世界にまれな平和な時代に生きた蕪村が、一生に作つた春の句のうち、恋の句と認められるのは、これまた

行く春や同車の君のさざめ言
雪解や妹が炬燵に足袋片し
琴心挑美人
妹が垣根三味線草の花咲きぬ

と、きはめて少く、夏、秋、冬とひもどいて見ても多くはなさゝうなのに一驚しました。恋をうたはないのは、して見ると俳句の傳統でせうね。そして、この傳統を破ることは、俳人として絶対不可能なのでせうか。

三

前の手紙でお怒りもなく、いま一つの句はいかにとの御便りに畏れいりました。

家郷の晝眠くなるまで柿食ひし

詠ひ手はあなたでなくて少年でせうね。他郷でひもじい思ひをしてゐたのが、慈母のもとに帰つて腹一杯柿を食べさしてもらつた、といふのでせうね。それならたしかに出來上つてゐますね。柿といへばルソン島で戦死した中島栄次郎が、いつか私と別れるとき示した句が

別るるや柿食ひながら丘の上

といふのでした。これは或ひは、中島自身の句ではなくつて、古人（惟然？）の句だつたかとも思ひますが、私はそのとき大いに感心したので、その證拠に十年後のいままでおぼえてゐるのです。しかし中島亡きいま、この句にはもう餘り感心してゐません。この時の彼と私の別れは、特急「櫻」「富士」「燕」の毎日往復してゐる東京と大阪との別れでしたが、いまでは永久の別れとなつたのですものね。惟然の当時だつたら、やはり一駅の別れでも中々あひ難ひ時代だつたのではないでせうか。假にほんの一時の別れとしても、柿食ひながらの行儀わるい別れに、何の情がこもつてゐるといふのでせう。京都の大学で田辺元先生から哲学を聴き、文学藝術をも愛すること深かつた彼にしていま一度帰つて來る日があれば、李白に対する杜甫の語ぢやありませんが、重ねて「細しく文を論じ」たいと思ひます。とまれ別れをさへ、さりげなく歌ふことが必要とされるところに、感傷的な詩人としての私が、俳句のまへに釈然とし得ない一理由が存することは告白しないわけには行きません。

貴簡でお示し賜つた佳句

枯野に延ぶ猫を轢きたる鐵路として

の批評も前言で盡したやうに思ひます。私はこの句をいたゞくとすぐ

枯野に延ぶ吾が兒轢きたる鐵路として
枯野に延ぶ妻を轢きたる鐵路として

の二句に作りなほして考へて見ました。猫のさりげないのに対して、吾兒、妻はドギツすぎませうね。そのうへ子規以來のレアリズムを奉じになる大兄は、妻や吾兒はこの関西本線（？）では轢かれてゐない、縁起でもないとお叱りでせうね。しかし事実、一日何往復のもつと小さな線でさへも、何人かの可愛い兒や、狂つた妻、或ひは生活に疲れた妻を轢いてゐるのを私たちは知らないでせうか。知つてうたへばなぜいけないのでせうか。日常茶飯事でないからいけないのでせうか。いつか詩心を得てお会ひした節、これらの点でお教へをいたゞければと思ひます。私も毎日の遠距離通勤に精も根も盡きて、詩心の欠乏を感ずること甚しいかなです。しかし大兄のおかげで、けふの休日に久しぶりで詩を論ずる氣になれたことを深謝いたします。妄言多罪。極月十九日。

（筆者は詩人・史学者・東大文学部出身）